

群馬県出土の三彩陶器について

神 谷 佳 明

(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

はじめに

出土遺跡について

出土遺跡・遺構の検討

おわりに

— 要 旨 —

本稿は平成28年度発掘情報館で実施した最新情報展第3期「奈良三彩からみた古代上野国」の成果を取りまとめたものである。

群馬県内からは唐三彩が2遺跡2点、奈良三彩が28遺跡128点の出土がみられる。出土した奈良三彩は小壺や小壺蓋が多く、次いで椀蓋、椀、火舎、短頸壺、そして全国的にも類例の少ない浄瓶、托も出土している。

出土した遺跡では飛鳥時代から奈良時代にかけて創建された山王廃寺や上植木廃寺、上野国分寺からは5点から8点、十三宝塚遺跡では74点と一遺跡からの出土例としては東国でも突出した出土がみられ、奈良三彩が生産された時期に存在した寺院には多くの奈良三彩が下賜されたことがわかる。

寺院以外の遺跡では二之宮宮下東遺跡、田端遺跡、八木原元宿南遺跡で祭祀の形態は異なるが祭祀行為に奈良三彩が使用されたことがみられた。祭祀とみられるなかではその目的や用途は不明であるが、貴重な奈良三彩を焼く行為が行われていたことが確認され、その行為は安養寺森西遺跡からの出土例をみると8世紀後半代には始まったと想定される。

集落遺跡からの出土例も多くみることができた。その多くは奈良三彩の生産時期と半世紀から一世紀、それ以上かけ離れた出土例がみられた。その多くは以前から指摘されているように在地に居住する僧侶の祭祀具であったと想定された。

そして群馬県内からの出土例は東国の中でも突出しているが、その大部分は十三宝塚遺跡の寺院跡からで、背景としては称徳天皇の采女として出仕し、重用された檜前部君老刀自の存在が大きかったと想定した。

キーワード

対象時代 古代

対象地域 群馬

研究対象 三彩陶器

はじめに

群馬県内からは唐三彩 2 遺跡 2 例と奈良三彩 28 遺跡 128 点(このうち上野国分寺から出土した短頸壺には同一個体とみられる個体が存在するため個体数としては 3 ～ 4 点減少する)以上の出土^{注1}と富岡市貫前神社に伝世する奈良三彩小壺をみることができる。

これらの唐三彩、奈良三彩陶器については群馬県埋蔵文化財センター発掘情報館にて平成 28 年度第Ⅲ期最新情報展「奈良三彩からみた古代上野国」と題した展示で奈良三彩を出土した遺構からの相伴遺物とともに展示を行い、古代上野国で唐三彩・奈良三彩陶器がどのような出土状況を示し、どのような使われ方をしていたかを考える展示を実施した。

その結果、奈良三彩の用途としては、群馬県内から出土したものも多くは今まで指摘^{注2}されてきたように仏事や祭祀としての使用方法が多いことを確認することができた。しかし、展示という限られた範囲のため、すべてを網羅することはかなわず、出土状況等も十二分に説明できたとはいえない。

そのため見学者に十分理解されたかは不安な点がある。こうしたことから今回、出土遺跡や出土状況についてとそこから想定される用途について再度提示することで展示の補完とした。

出土遺跡について

1. 唐三彩

多田山古墳群 遺跡は伊勢崎市赤堀町今井及び前橋市東大室町に位置し、赤城南麓にある標高 159m を最高地とする多田山に立地する。多田山は赤城山の山体崩壊に伴い起こった岩屑なだれの堆積物が流れ下って南北 2km、東西 1km に形成された山である。発掘調査は北関東自動車道の建設で使用する土砂採取とその後の住宅団地造成に伴うもので約 29 万 m² に及ぶ面積が発掘調査され、旧石器時代、縄文時代、古墳時代、奈良・平安時代にわたる遺構が検出されている。

古墳群は古くから多田山古墳群として知られ、1929 年には帝室博物館調査官 後藤守一によって今井茶臼山古墳、1952 年には群馬大学によって中里古墳、1990 年には赤堀町教育委員会によって「見切塚 1 号墳」などが発掘調査されている。

古墳群は主に南北に延びる尾根上に構築されている。今回、発掘調査された古墳群は、多田山最高地点から南側尾根の東斜面に構築されていた。古墳は中里古墳、見切塚 1 号墳を含めて 22 基が調査されている。また、古墳群の中は北側から 1 号墳～ 11 号墳・14 号墳の集団、中里古墳・12 号・13 号墳の集団、15 号～ 18 号墳の集団、19 号・20 号墳・見切塚 1 号墳の集団に区分できる。報告者は、古墳群内の多田山 12 号墳、15 号墳、中里古墳

は截石切積石室によることから「地域首長」の古墳とし、その他の古墳については地域首長に次ぐクラスか家長層クラスの古墳としている。終末期に構築された古墳では出土している土器からほとんどの古墳でその後の追善供養が行われているとされている。また、12 号墳や中里古墳、15 号古墳などの周囲では 8 世紀代の火葬骨を埋葬したとみられる墓(以後、火葬墓と呼称)が検出されている。報告者は出土状況から確実に火葬墓と認定できるのは見切塚 5 区 8 号火葬墓だけであるとしているが、過去に報告されている火葬墓や発掘調査で火葬骨を納めたとみられる須恵器短頸壺や石製蔵骨器が出土していることから多くの火葬墓が存在していたとし、その位置関係から終末期古墳と火葬墓とが無関係とは考えにくいのではないだろうか判断している。こうした状況から 8 世紀代には終末期古墳の首長墓周囲では追善供養が行われるとともに首長墓に被葬された一族の墓域として使用されたことが想定できる。

唐三彩は 12 号墳から陶枕が出土している。この陶枕は全体の三割ほどの残存ではあるが、長辺 11.4cm、短辺 9.1cm、器高 5.1cm の大きさであることがわかっていく。文様は表裏に宝相華文が型押しで施文されているが、境ヶ谷戸遺跡から出土したもののように周囲には施文されていない。出土状況は前庭部全域から細片に破損した状態であった。こうした出土位置や状況から墓前祭祀か追善供養に使用されたとみられる^{注3}。その年代については明確ではないが、8 世紀後半代と想定されている。**境ヶ谷戸遺跡** 遺跡は太田市新田町村田に位置し、赤城山南東麓の大間々扇状地末端の関東平野北西部に立地する。遺跡の東北 2km には新田郡衙の郡庁や正倉が発見された天良七堂遺跡、北東 1km には東山道新田駅家に想定される入谷遺跡が存在する古代上野国新田郡の中核地域に所在する。

発掘調査は送電線鉄塔建設に伴って行われたため 30m 四方と限定された範囲であったが、8 世紀から 9 世紀前半の竪穴建物が 14 棟、ほぼ同時期とみられる掘立柱建物 5 棟など多くの遺構が検出されている。出土遺物には唐三彩の他に酸化炎焼成で外面に数段の螺旋状、内面に斜格子状暗文が施された須恵器や大型の獣脚付火舎、塔椀とみられる蓋摘片、特殊な形態をした容器とみられる破片など類例をみない土器や円面硯が出土しており、一般的な集落ではないとされている。集落の性格については入谷遺跡に近いことから駅家に関連する集落との想定もあるが、出土遺物に塔椀など仏教的要素の強い土器が出土していることから隣接地に寺院が存在していたことも想定される。

唐三彩は 2 号竪穴建物から出土している。この竪穴建物は東西 9.0m、南北 7.9m と大型で南辺に方形の張り出しを持ち、周溝の状態から 2 度の拡張が行われたとみら

れる。唐三彩は陶枕上面から側面にかけての破片2点で、接合するものである。上面には中央に宝相華、周囲に花卉状の文様が描かれている。出土位置は張出し部の床面と床下からの出土とされ、この竪穴建物に伴うものと判断される。共伴遺物には杯、盤、高杯などの多くの供膳具と獣脚付火舎が出土しており、これらの遺物は8世紀第3四半期に比定される。

2. 奈良三彩

(1) 寺院

飛鳥時代(7世紀後半・白鳳期)創建寺院^{通注}

山王廃寺 前橋市総社町に位置し、利根川右岸の前橋台地に立地する。古代寺院の存在は大正期に発見された塔心礎によりその存在が知られていた。戦後、塔心礎の脇から塔柱の根巻石も発見されている。付近の民家には石製鴟尾も保管されており、大規模な伽藍を有する寺院であったと想定されている。その後、前橋市教育委員会によって調査が進められ、古代寺院としては希である寺院名も出土瓦の刻書から「放光寺」と判明している。伽藍配置は80m四方の回廊が囲む内部の西に金堂、東に塔が建てられ、北側回廊に講堂がとりつく法起寺に近い配置であることと、講堂の北側に僧坊または食堂と想定される大型掘立柱建物が存在することがわかっている。

奈良三彩は8点が出土している。出土した奈良三彩はすべて小片ではあるが、火舎、椀、椀蓋、壺2、不明3点である。出土位置は塔と金堂の間の6次調査で第4点、講堂の南の平成18年度調査でから椀蓋が出土している。出土した遺構は古墳時代後期の竪穴建物であることから、遺構に伴うものではなく、後に混入したとみられる。この他、回廊の東側約25m地点の第5次調査で火舎、第2次調査で検出された僧坊か食堂と想定される大型掘立柱建物の西側から椀、この建物の東側から器種不明の小片が出土している。

上植木廃寺 遺跡は伊勢崎市本関町、上植木本町に位置し、赤城山南麓の末端、南北に延びる舌状台地上に立地する。遺跡地の南1kmには古代佐田郡衙の正倉と推定される三軒屋遺跡が存在する。遺跡は明治期に礎石や多量の瓦が出土してことから寺院の存在が知られていた。寺院の施設は昭和57年度からの発掘調査によって中門、金堂、塔、講堂、回廊、食堂などの施設が確認され、寺域もほぼ確認されている。伽藍配置は南門、中門、金堂、講堂、食堂が中軸線上に配置され、金堂を中心に中門と講堂が南北73m、東西67mの回廊によって結ばれている。塔は回廊内部、金堂の南西に位置する。創建については出土した単弁八葉蓮華文軒丸瓦や三重弧文平瓦等から7世紀後半代に想定されている。

奈良三彩は1982年度、1983年度、1984年度、1985年度、1989年度の発掘調査で出土しているが、すべて小片である。そのうち、10点ほどを実見したところ椀

蓋6点、短頸壺の胴部とみられる破片3点、瓶とみられる胴部小片1点が確認できた。また、椀蓋は6点出土しているが、釉薬の様子から2個体の破片とみられた。

出土位置については詳細が記載されていないが、1982年度の出土が塔周辺、1983年度が南門と食堂、1984年度が金堂北側、1985年度が金堂、1989年度回廊内部の南東部とされている。

寺井廃寺 太田市市街地の北西、寺井町から天良町に位置し、大間々扇状地の南東端部に立地する。古くから瓦の散布が知られており古代寺院が存在することが想定されていた。この地域は宅地化が早くから進み大規模な発掘調査を行うことが難しく、開発に伴い一部の発掘調査が実施されているにとどまっている。その発掘調査では明確な基壇などが検出されていないため、伽藍配置など詳細についてはわからないことが多い。出土した軒丸瓦には鋸歯文縁八葉複弁蓮華文瓦や複弁七葉文、単弁十六葉文、単弁五葉文、単弁四葉文瓦、軒平瓦には重弧文、唐草文、格子目文等が見られる。こうした瓦の状況から創建期の瓦は川原寺式の軒瓦が葺かれていたとみられ、創建は7世紀末に想定されている。これらの瓦は金山古窯跡群の萩原窯跡で焼成されたとみられる。

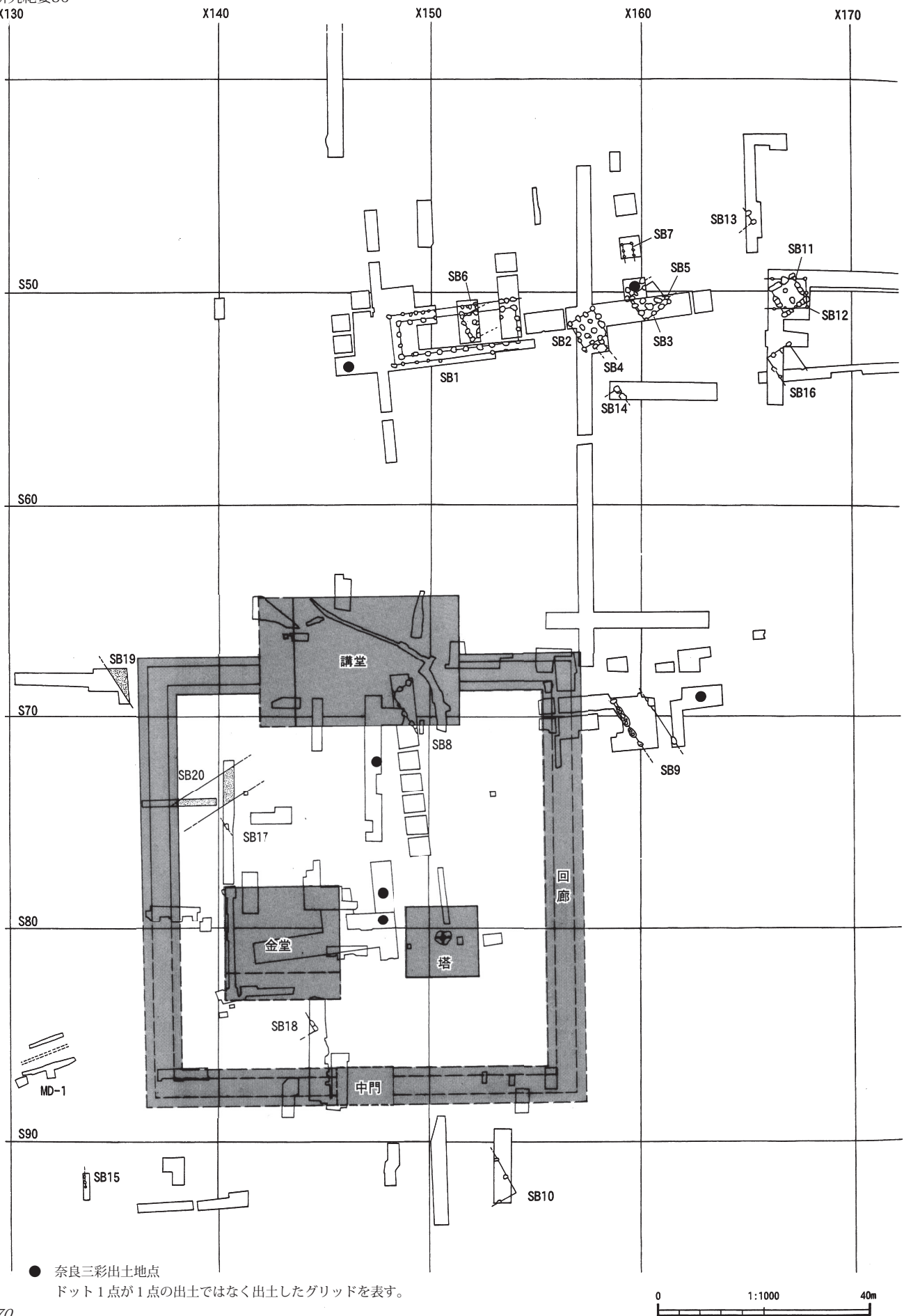
また、西側には新田郡衙政庁や正倉が見つかった天良七堂遺跡が存在することから新田郡の郡寺であった可能性が指摘されている。

奈良三彩は獣脚付火舎の脚部の火舎に接続する部分の小片が出土している。出土位置や状態など詳細については不明である。

奈良時代創建寺院

上野国分寺 高崎市東国分町・引間町(旧群馬町)、前橋市元総社町に位置し、相馬ヶ原扇状地が前橋台地に移行する地点に立地する。天平十三(741)年に聖武天皇の詔によって全国に造営された国分寺の一つである。上野国分寺はその寺域として南北235m、東西220mの範囲が想定されている。伽藍配置は南北の中心軸に対して南大門、中門、金堂、講堂が一直線上に並び中門と金堂は回廊によって結ばれている。塔は金堂の西側に配置される。なお、伽藍配置については平成25年度以降に実施された発掘調査で以前金堂とされていた基壇建物が講堂であることが判明し、南大門と中門の間が狭まるなどの修正が行われている。

奈良三彩は短頸壺、大型椀、小壺などが出土している。短頸壺は底部片1点、胴部片3点が出土しており、釉調などから同一個体の可能性が高いとされる。大型椀は口縁部片3点、体部片2点、体部片1点が出土し、釉調から同一個体として復元図が描かれているが、内面の施釉状態を見ると口縁部片と体部片と底部片は釉調がやや異なることと復元図に違和感が見られることなどから複数の個体が存在する可能性が窺える。小壺は頸部から



第1図 山王廃寺奈良三彩出土地点

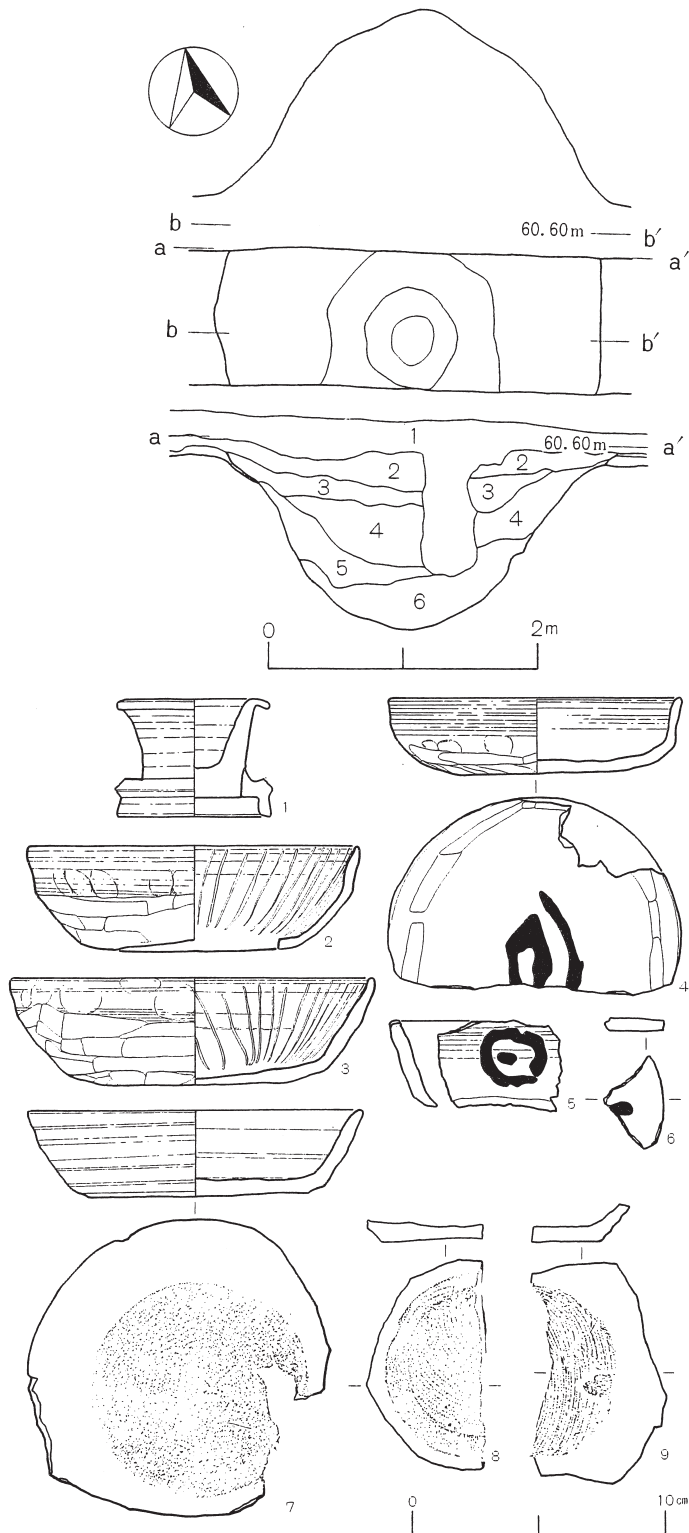
胴部片と底部から胴部下位片が出土している。この他、器形などが不明なものが2個体ほど出土している。なお、この個体については口径26.4cm、底径10.2cmを測るとされている。

出土位置については大型椀が「5トレンチ」とあるが、詳細な地点は不明である。また、短頸壺は19次調査とされているがこれも詳細は不明である。

十三宝塚遺跡 遺跡は伊勢崎市境伊与久に位置し、伊勢崎台地の東縁辺に立地する。発掘調査当時は佐位郡衙との想定もされていたが、現在では寺院と付随する雑舎群や集落と考えられている。寺院は台形状区画を呈し、東辺92mが南北方向を向き、南辺82mに対し北辺60mと短い。区画は北辺から西辺には溝が巡り、その内側を北辺は柵、溝、土塁、東辺から南辺・西辺は二重の柵状に柱穴列が巡ることから回廊とみられる。南側回廊の中央には門とみられる掘立柱建物も確認されている。回廊内部は中央と南西部、北西部に版築された基壇3基、北東部に掘立柱建物2棟が存在する。また、東辺南寄りには基壇と回廊が重複する箇所も存在する。寺院区画の北東側と南東側には多くの掘立柱建物群と竪穴建物群がみられる。北側の発掘調査では竪穴建物が主体を占めている。回廊区画の南100mには大溝、北側200mには推定東山道駅路(牛堀・矢ノ原ルート)が存在し、これが南北の大きな区画とみられる。遺跡内からは瓦をはじめ塑像片、銅製押出仏片、須恵器鉄鉢、原始灰釉陶器浄瓶など寺院関連や仏具とみられる遺物が多く出土している。なお、この寺院は出土遺物から8世紀後半に建立され、9世紀末まで存在していたと想定される。

奈良三彩は74点が出土している。出土した器種は椀、杯、皿、鉢、盤、托、小壺、壺、火舎など第1表に示したように多岐にわたっているが、大部分は小片である。出土地点は回廊内の基壇やその周辺からと回廊東側の掘立柱建物、竪穴建物から多く出土している。托は回廊北側の5次調査で土坑からの出土である。

遺構ごとに出土をみると伽藍内部の基壇1からは13点、その内訳は椀8点、盤2点、鉢と火舎、器種不明の個体が各1点、基壇2から小壺片1点、基壇3から椀と火舎各1点、回廊と重複する基壇4から椀2、盤1点である。なお、報告書に掲載されている「三陶器彩の分布」によると区画内からは椀が4点出土している。寺院区画東側の掘立柱建物群からは椀や鉢など8点が出土しているが、複数の出土は掘立柱建物Hから椀2点と鉢1点が出土しているのとどまる。竪穴建物では4棟から6点が出土している。このうち竪穴建物16からは椀1点、竪穴建物27からは鉄鉢片1点、竪穴

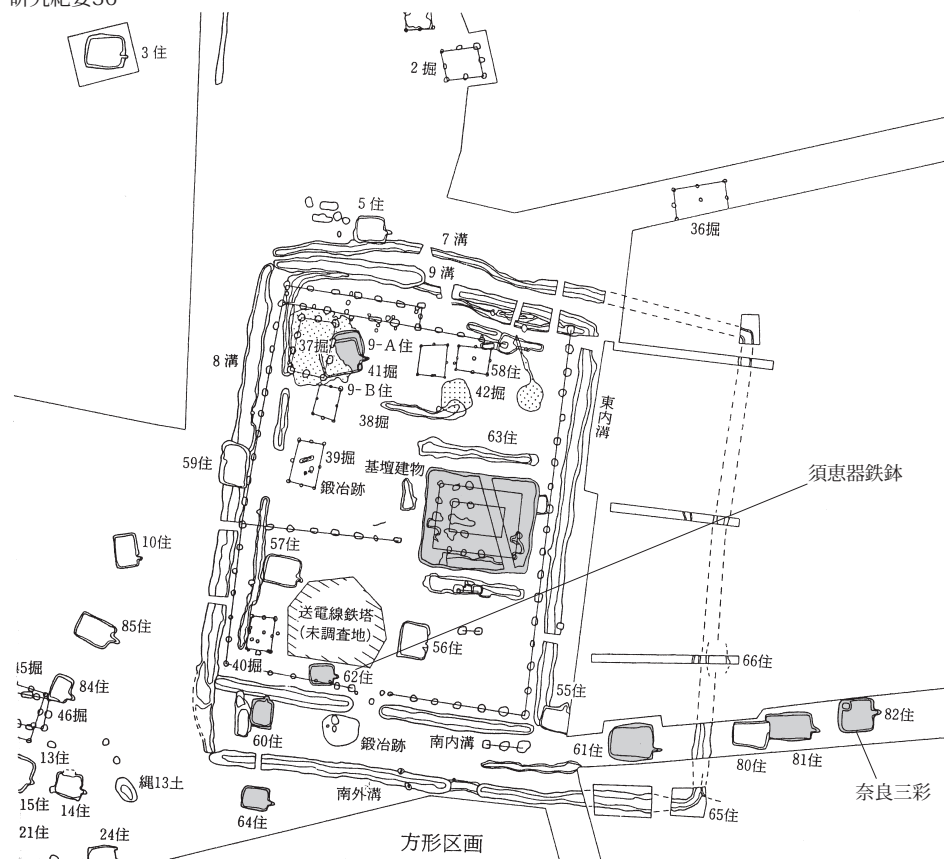


第2図 十三宝塚遺跡(5次調査)出土の奈良三彩托(1)と出土遺構第V号土坑と共伴遺物

建物33からは火舎1点、竪穴建物38からは鉄鉢1点と火舎2点が出土している。この他は、試掘トレンチや発掘調査時に採取されたもので出土地点は明らかにされていない。

第1表 十三宝塚遺跡出土奈良三彩

第5篇第9章出土遺物 奈良三彩集成の項目(245・246頁)					第5篇第1章～4章での掲載頁				
	NO.	器種	部位	出土位置(302図による)	備考	挿図	NO.	出土遺構	
303図	1	碗	底部片	試掘トレンチ(回廊)	二次被熱				
303図	2	碗	底部～体部下位片	表採(基壇1北側)		43図	105	基壇1-2	
303図	3	碗	底部～体部下位片	表採					
303図	4	皿・碗	体部片	表採					
303図	5	杯・碗	体部片	試掘トレンチ	二次被熱				
303図	6	皿・碗	体部小片	表採					
303図	7	杯・碗	体部小片	表採					
303図	8	火舎・皿	底部小片	表採					
303図	9	皿・碗	底部小片	表採					
303図	10	碗	口縁部小片	Ra6aグリッド(掘立柱建物A・B)					
303図	11	碗	口縁部小片	試掘トレンチ(回廊)		83図	3	基壇4-3	
303図	12	碗	口縁部小片	試掘トレンチ(掘立柱建物G3)					
303図	13	碗	口縁部小片	J16(基壇1南)					
303図	14	碗	口縁部小片	表採					
303図	15	碗	口縁部小片	試掘トレンチ(東回廊)		83図	2	基壇4-2	
303図	16	碗	口縁部小片	K17西南					
303図	17	碗	口縁部小片	表採					
303図	18	碗	口縁部片	試掘トレンチ(東回廊)	二次被熱				
303図	19	碗	口縁部片	試掘トレンチ(掘立柱建物C1)		95図	2	掘立柱建物D-2	
303図	20	碗	口縁部下半～体部片	不明					
303図	21	碗	口縁部下半～体部片	表採(基壇1)	二次被熱	43図	106	基壇1-106	
303図	22	碗	口縁部～体部片	C16-4		156図	1	竪穴建物16号-1	重複遺構 無 共伴遺物 無
303図	23	碗	口縁部片	基壇1 北側		44図	122	基壇1-122北西部E8S4	
303図	24	碗	1/4	J17-3、溝5他		46図	127	基壇1-127 J17 3溝埋土	
303図	25	碗か	体部小片	表採					
303図	26	碗か	体部小片	K-16					
303図	27	碗・鉢	体部小片	試掘トレンチ					
303図	28	碗・鉢	体部小片	E7S					
303図	29	碗・鉢	体部小片	表採					
303図	30	碗・鉢	体部小片	表採		100図	1	掘立柱建物H-1	
303図	31	碗・鉢	体部小片	表採					
303図	32	碗か	体部小片	基壇1 東表採					
303図	33	碗か	体部小片	基壇1 東北		43図	107	基壇1-107	
303図	34	碗・鉢	体部小片	基壇1 南		36図	68	基壇1-68 南	
303図	35	碗・鉢	体部片	基壇3 東		81図	2	基壇3-2	
303図	36	碗か	体部片	基壇1 東北表採		43図	108	基壇1-108	
303図	37	碗・鉢	体部片	表採					
303図	38	碗か	底部小片	試掘トレンチ					
303図	39	碗か	底部片	試掘トレンチ		93図	1	掘立柱建物C-1	
303図	40	碗	底部片	表採					
303図	41	碗	底部～体部下位片	I18(回廊北東角)					
303図	42	碗	体部片	I18(掘立柱建物24周辺)					
303図	43	碗	底部～体部下位片	掘立柱建物4(掘立柱建物D1)		95図	3	掘立柱建物D-3	
304図	44	皿	口縁部～底部片	不明					
304図	45	碗	底部～体部下位片	E9S6拡張					
304図	46	盤	口縁部片	J16(基壇1)		36図	67	基壇1-67 J16h08	
304図	47	盤	口縁部片	基壇上東表採E9S6		30図	27	基壇上東表採E9S6	
304図	48	盤	口縁部片	不明					
304図	49	盤か	底部片	試掘トレンチ	二次被熱	83図	1	基壇4-1	
304図	50	鉢(仏鉢か)	口縁部片	竪穴建物38号	9C・Ⅲ	209図	15	竪穴建物38号-15	重複 有 9C・前半
304図	51	鉢(仏鉢か)	口縁部片	I-16(竪穴建物27号)	9C・Ⅳ	179図	25	竪穴建物27号-25	竪穴建物28と重複 10C・Ⅰ
304図	52	鉢	口縁部小片	試掘トレンチ(掘立柱建物D1)		95図	1	掘立柱建物D-1	
304図	53	鉢	体部小片	I17i4					
304図	54	鉢	体部片	E8S6					
304図	55	鉢か	体部片	E8S4					
304図	56	鉢か	体部片	J17		43図	109	基壇1-109	
304図	57	鉢か	体部片	J16					
304図	58	小壺	口縁部～胴部上半片	不明	二次被熱				
304図	59	小壺か	胴部上半片	基壇2北E79S6、基壇1東表採		74図	148	基壇2-148	
304図	60	小壺か	胴部小片	8F6a					
304図	61	壺	胴部上位片	試掘トレンチ					
304図	62	不明	小片	基壇1		44図	121	基壇1-121 17b1-2	
304図	63	不明	小片	J17					
304図	64	不明	小片	表採					
304図	65	不明	胴部小片か	表採					
304図	66	不明	胴部小片か	基壇1 東表採	二次被熱	88図		N2トレンチ-2	
304図	67	火舎	体部小片	不明		36図		基壇1-67	
304図	68	不明	底部片	J16					
304図	69	火舎	口縁部片	竪穴建物33号	二次被熱・火舎	196図		竪穴建物33号-28	
304図	70	火舎	三足獣脚の一足	基壇3 K17		81図	3	基壇3-3	
304図	71	火舎	体部下位片	竪穴建物38号		209図	13	竪穴建物38号-13	
304図	72	火舎	体部片	竪穴建物38号		209図	14	竪穴建物38号-14	
		托	口縁部欠損			第6図	1	第VA土坑	境町教育委員会1981
		小壺	口縁部～胴部片			口絵18			境町1996



第4図 上西原遺跡奈良三彩・須恵器出土遺構位置と同時期の遺構
網掛けした遺構が82号竪穴建物と同時期の9世紀後半に存続した遺構

鍛冶、9世紀第4四半期の須恵器窯等が検出されている。この中でも1辺70mの溝と土塁による方形区画の内部を溝と柵による区画が行われ、中央東側に基壇がもうけられている施設が検出され、注目された。この施設は瓦や瓦塔が出土していることから寺院と推定されている。

寺院は約70m四方を方形に溝で区画され、その内部の西寄りが南北58m、東西42mの範囲を溝で区画されている。さらに内側の溝に沿って柵が巡らされている。柵内部はさらに中程を南北に分ける柵が設けられ柵の東側には四面庇を有する基壇建物が存在する。この他に北辺や西辺寄りに小規模な掘立柱建物が検出されている。この寺院は十三宝塚遺跡と同様ように8世紀末に創建され、9世紀末まで存在していたと想定される。報告書の考察^{注4}によると寺院の変遷は6期が想定されており、最終末の6期には区画の溝や土塁、柵は存在せず、主となる基壇建物だけの状態であったとされている。また、この段階では南側の区画溝沿いや北西角に竪穴建物が構築されるようになる。この竪穴建物のうち62号竪穴建物からは須恵器鉄鉢、82号竪穴建物からは奈良三彩小壺が出土しており、庶民が居住した竪穴建物ではなく、僧侶や寺院に関係する人物が居住していた可能性が窺える。

奈良三彩は前記のように82号竪穴建物から小壺が出土している。奈良三彩小壺は蓋を欠くが完形品で口径

3.0cm、器高4.0cm、胴部最大径9cm、釉薬は大分退色しているが、緑・褐・白の識別が可能である。出土位置は貯蔵穴に隣接する柱穴内からでこの竪穴建物に共伴するものである。82号竪穴建物は共伴する須恵器から9世紀第3四半期に比定される。

(2) 祭祀

二之宮宮下東遺跡 遺跡は前橋市二之宮町に位置し、赤城山の広大な裾野である南麓の末端に立地する。赤城南麓は緩やかな台地を形成しているが、この台地は多くの小河川によって開析谷が形成されている。遺跡地の周辺には主に古墳時代から平安時代の集落遺跡が形成されている。発掘調査では縄文時代や弥生時代の遺構・遺物が若干見られるが、主体は古墳時代から平安時代にかけてと中世の遺構・遺物である。遺構には古墳時

代後期から平安時代にかけての竪穴建物や水田、多くの遺物が出土した旧流路跡が検出されている。

奈良三彩は3区旧流路から小壺の底部から胴部下位小片が出土している。破片は小片ではあるが、図上での復元は可能で、底部径5.2cmを測る。奈良三彩を出土した旧流路は古墳時代中期から平安時代9世紀末頃までの土器・施釉陶器、土製品、石製模造品、木器等が多量に出土している。なお、この流路は埋没した時期が10世紀後半から11世紀にかけてとみられ、その段階では水田へと開墾されている。出土遺物には鋤・鍬、土錘や木製錘など農耕や漁業に使用された実用品も出土しているが、石製模造品や則天文字で「天」と墨書された土器も出土していることから祭祀行為も行われたとみられる。奈良三彩が出土した15層からは土師器杯、須恵器杯蓋・身、長頸壺、短頸壺と手捏ね土器、石製模造品白玉が出土している。ここから出土した土師器や須恵器の杯(蓋を含む)には則天文字「天」が墨書されていた。こうした出土遺物からもこの層位の段階では祭祀行為が複数回行われたと見られる。

田端遺跡 遺跡は高崎市阿久津町・木部町に位置し、烏川と鍋川の合流付近、鍋川の左岸自然堤防上に立地する。現在、遺跡は阿久津45遺跡・阿久津50遺跡・阿久津51遺跡と呼称されている。

発掘調査では縄文時代、古墳時代、奈良～平安時代、中世の各時代の遺構が検出されている。奈良～平安時代の遺構には竪穴建物278棟他、掘立柱建物、土坑、溝等がみられ、多くの土器とともに多くの瓦が出土している。こうした状況から発掘調査区の西側に7世紀末創建による寺院が存在した可能性が指摘されている。

奈良三彩は田端地区B区127号土坑から小壺の底部から胴部下半片が出土している。報告書では緑釉陶器とされているが、実見したところ、一部に白釉が確認されることから二彩と判断された。大きさは底径3.8cmを測

る。出土したB区127号土坑は他の複数遺構と重複しており、明確な形状などは不明であるが、径0.7m、深さ15cmほどの規模である。他に共伴する土器は掲載されていないが、遺構の記載には8世紀から9世紀に比定され、二彩陶器の生産年代とも隔たりない時期の遺構である。また、この土坑の位置は推定される寺域の東側に相当する。こうしたことから地鎮に伴うものとも考えられるが、二彩小壺だけの出土であるため言及は難しい。

八木原元宿南遺跡 遺跡は渋川市八木原に位置し、利根川が上流から中流域に移行する右岸の有馬扇状地の扇



第5図 八木原元宿南遺跡全体図(上左)、奈良三彩出土の1号石組遺構(上右)、出土奈良三彩と共伴遺物

端、扇状地の中央を流れる滝沢川の左岸沿いに立地する。発掘調査では近世の畑や古代の石組遺構が検出されている。

奈良三彩は1号石組遺構から頸部から口縁部を欠いた浄瓶が出土している。石組遺構は3基検出されているが、2号・3号は残存状態が悪く明確ではない。1号石組遺構は南北2.98m、東西3.95mの長方形の範囲に20～30cmの各礫が配置され、西辺中程に径20cmほどのピットが配置されている。共伴する遺物には須恵器杯、土師器杯、鉄釘が見られる。この他、本文中には緑釉陶器の出土についても記述されているが、詳細は不明である。

奈良三彩浄瓶は、前述のように頸部から口縁部と胴部と注口の一部を欠損した状態である。計測値は高台径9.8cm底径7.2cm、胴部最大径12.5cm、残存高15.0cmを測る。釉調は退色のため鮮明ではないが、緑釉と白釉の二彩である。施釉状態は緑釉を雑な襷掛け状に施釉し、その後に白釉を施釉している。底部付近から脚部はほとんど緑釉単彩に近い。底部内側は施釉されていない。

共伴遺物は1の須恵器杯が9世紀前半、2・3の土師器杯が8世紀後半、4・5の土師器杯は小片のため不明確な点があるが9世紀中頃に比定される。

調査の所見では鉄釘が出土していることから墓坑の可能性が指摘されている。しかし、遺構の規模が大きいかことや共伴する遺物に1世紀ほどの時期差が見られ、短期間の使用ではなく長期間に及ぶ使用の可能性も窺えることから墓坑以外の可能性も考える必要がある。

奈良三彩浄瓶は、本遺跡の他に福島県七ツ池遺跡、埼玉県氷川神社東遺跡、岐阜県正家廃寺、熊本県陣山遺跡^{注5}から出土しているが、全国的に見ても希少な器種である。

なお、本遺跡の西北西1kmには8世紀前半に創建されたと想定されている有馬廃寺が存在する。有馬廃寺については瓦が広範囲から出土していることから伽藍を有する寺院と想定されているが、詳細については不明である。

(3)集落

上野国分僧寺・尼寺中間地域 遺跡は前橋市元総社町から高崎市東国分町(旧群馬町)に位置し、相馬ヶ原扇状地が前橋台地に移行する地点に立地する。調査は関越自動車道建設に伴い実施され、対象は染谷川と牛池川に挟まれた全長1.1kmの範囲である。主の遺構は竪穴建物1334棟、掘立柱建物、井戸、土坑など縄文時代から中世にかけてのものがみついている。特に7世紀後半から10世紀末にかけての竪穴建物1200棟が検出され、この時期は連綿と継続して集落が営まれていたことがわかっている。また、掘立柱建物では規則的な配置による施設もみつきり国分寺に関係する施設であると想定されている。

奈良三彩は調査区の中程、G区26号竪穴建物から小

壺の底部から胴部下位片が出土している。小片であるため大きさについては明確ではないが、底径は推定4.3cmとみられる。G区26号竪穴建物からは須恵器碗、灰釉陶器碗、須恵器羽釜、土師器甕が出土しており、これら共伴する土器から竪穴建物の存続時期は10世紀第2四半期に想定される。

元総社蒼海遺跡群 遺跡は前橋市元総社町に位置し、相馬ヶ原扇状地が前橋台地に移行する地点に立地する。遺跡地は古代上野国府北西域に相当するとともに上野国分尼寺の南に当たる。発掘調査は開発行為に伴い実施されているため狭小の地点も存在する。2017年3月時点で121地点の報告書が刊行され、古代の遺構・遺物が大量に検出・出土している。その中には多くの灰釉陶器や緑釉陶器が含まれている。奈良三彩は13次と41次の発掘調査で出土している。

13次調査は遺跡地範囲の北端と西端の調査であるが、奈良三彩を出土したのは国分寺中間地域に近い西端の調査区である。出土した遺構は1区3号竪穴建物である。奈良三彩は小壺の底部で底径5.5cmを測る。なお、H3号竪穴建物には須恵器碗や緑釉陶器稜碗が共伴しており、存続時期は9世紀第4四半期から10世紀第1四半期に比定される。

41次調査は遺跡範囲の北東部に相当し、13次調査で奈良三彩を出土した調査区の北側に50mほどの調査区である。奈良三彩を出土した遺構はH4号竪穴建物である。奈良三彩は碗蓋の口縁部破片で口径は12.4cmと推定されている。H4号竪穴建物には須恵器杯と土師器台付甕が共伴しており、存続年代は9世紀第2四半期に比定される。

元総社西川遺跡・塚田中原遺跡 前橋市元総社町、高崎市塚田町・引間町(旧群馬町)に位置し、榛名山東南麓の相馬ヶ原扇状地の東端部から前橋台地に移行する地域に立地する。発掘調査時、この地域は塚田中原遺跡、塚田村東遺跡、引間松葉遺跡、鳥羽遺跡など多くに遺跡分布がみられるが、地区で遺跡範囲が指定されている。しかし、遺構の検出状況を見ると竪穴建物群としての分布が把握できるところもみることができ、立地として明確な区分が難しく広域に広がる遺跡であることがわかる。遺跡は竪穴建物を主にする飛鳥時代～平安時代の集落である。東側に存在する鳥羽遺跡では神社と想定される遺構や連房状の鍛冶遺構が検出されており官衙的要素がみられる。

奈良三彩は154号竪穴建物から小壺、219号土坑から碗蓋、0区16号溝から小壺蓋、遺構外から壺胴部片が出土している。

154号竪穴建物から出土した奈良三彩小壺は底部から胴部下半にかけての破片で底径4.0cmである。出土位置はカマド内とされている。カマド構築部材の内か外かは

不明であるが、奈良三彩の内面や断面が炭化していることから燃焼部や煙道など火を受ける力所に置かれていた可能性が窺える。共伴する土器には土師器甕や須恵器碗、灰釉陶器碗などがある。154号竪穴建物の存続時期については共伴する須恵器碗や土師器甕から9世紀第3四半期の年代が想定される。

219号土坑から出土した奈良三彩は碗蓋の天井部から口縁部の破片で口径13.8cmである。この土坑は細長い長方形状を呈し、長軸約3m、短軸2.0m、深さ0.7mと大規模なものである。出土遺物には須恵器無台碗と有台碗、木片の付着した鉄製釘がみられる。219号土坑の時期については共伴する須恵器碗から8世紀第4四半期の年代が想定される。この土坑については木片が付着した釘が出土していることから墓坑との想定も可能であるが、長軸方向が3mと長いことから他の用途も想定しなければならない。

遺構外から出土した奈良三彩は壺の胴部とみられるが小片のため明確ではない。

0区16号溝から出土した奈良三彩は小壺蓋で完形品である。摘まみは擬宝珠状を呈し、口径4.4cm、摘径1.4cm、器高1.6cmである。施釉は緑色と白色を放射状に3ヶ所配色した後緑色の中程に褐色を廃している。なお、摘は緑色である。溝からは9世紀から10世紀にかけての須恵器碗、杯蓋、長頸壺、平瓦等が出土しているが、出土位置が埋没土中程であることから埋没課程の段階で流れ込んだと想定されている。なお、溝の底面や側面の状態から人為的な掘削によるものとは考えられていない。

下東西清水上遺跡 遺跡は前橋市青梨子町に位置し、相馬ヶ原扇状地の東扇端から前橋台地に移行するところに立地する。東に隣接する下東西遺跡の発掘調査では7世紀末から8世紀初頭にかけての豪族居宅とみられる施設が検出されている。この施設では溝で区画された内部を南北に柵と溝によって区画され、南側の区画には2棟の竪穴建物を廊下状の遺構で連結した特殊な竪穴建物が見つかった。北側の区画では孫庇をもつ大型の掘立柱建物が検出されている。下東西清水上遺跡では主に8世紀後半から10世紀にかけての竪穴建物が193棟検出され、銅鍔片や外面に暗文が施された酸化焰焼成による須恵器や多くの灰釉陶器、緑釉陶器が出土している。

奈良三彩は35号竪穴建物から香炉体部の小片が出土している。35号竪穴建物には土師器甕や灰釉陶器碗が共伴しており、存続年代は10世紀前半代に想定される。**清里南部遺跡群中島遺跡** 遺跡は前橋市青梨子町に位置し、相馬ヶ原扇状地の東扇端から前橋台地に移行するところに立地、前記の下東西清水上遺跡の西、後記の薬師前遺跡の東に位置する。発掘調査では竪穴建物87棟と土坑、溝などが検出されている。詳細はわからないが竪

穴建物は7世紀後半から10世紀代にかけて比定されるものである。奈良三彩は「Ⅱ発掘調査の概要、4.遺物(1)

概要」に「表採では、縄文土器・石器や二彩(小片などで三彩の可能性もある)が発見された。」と記載されており、器種や点数などは明らかではない。

清里南部遺跡群薬師前遺跡 遺跡は前橋市青梨子町に位置し、相馬ヶ原扇状地の東扇端から前橋台地に移行するところに立地する。発掘調査では古代の遺構は竪穴建物が主体とされ28棟が検出されている。詳細はわからないが竪穴建物は8世紀後半から10世紀代にかけて比定されるものである。

奈良三彩は概報に写真図版(図版3-19)が掲載され小壺とみられるが、判然としない。観察表では器種不明とされ、破片の規模が4.0×2.8cmとされている。出土遺構はF区の3・4号・16～25号・28号竪穴建物とされており、これらの竪穴建物の時期は8世紀終末～10世紀末と記載されている。

西国分新田遺跡 遺跡は高崎市金古町(旧群馬町)に位置し、榛名山東南麓の相馬ヶ原扇状地扇尖、牛池川と染谷川の間に立地する。

南側には三ツ寺I遺跡と同様な居館である北谷遺跡とこれに伴う祭祀・集落遺跡の冷水村東遺跡が存在する。なお、遺跡は行政上の区分のため冷水村東遺跡とは区分されているが、本来は集落に続く生産遺構として把握することができる。

奈良三彩はF区の浅間B軽石層下の水田耕作土から出土している。出土した奈良三彩は小壺の底部から胴部下半である。底径は4.0cmを測る。奈良三彩小壺は釉薬が剥落し、部分的に炭化した状態であった。こうしたことから出土地の近くで焼成を受けたと見られる。

こうした焼成を受けた奈良三彩には前記の元総社西川遺跡・塚田中原遺跡154号竪穴建物カマドから出土した小壺や安養寺森西遺跡AY—15号竪穴建物から出土した小壺、東京都調布市上石原遺跡の多口瓶をみることができる。西国分新田遺跡出土の小壺は状況から見ると上石原遺跡出土のものに類似するとみられる。なお、詳細については次項に記す。

熊野堂遺跡 遺跡は高崎市大八木町から井出町(旧群馬町)にかけて位置し、榛名山東南麓の相馬ヶ原扇状地の西端の井野川左岸に立地する。

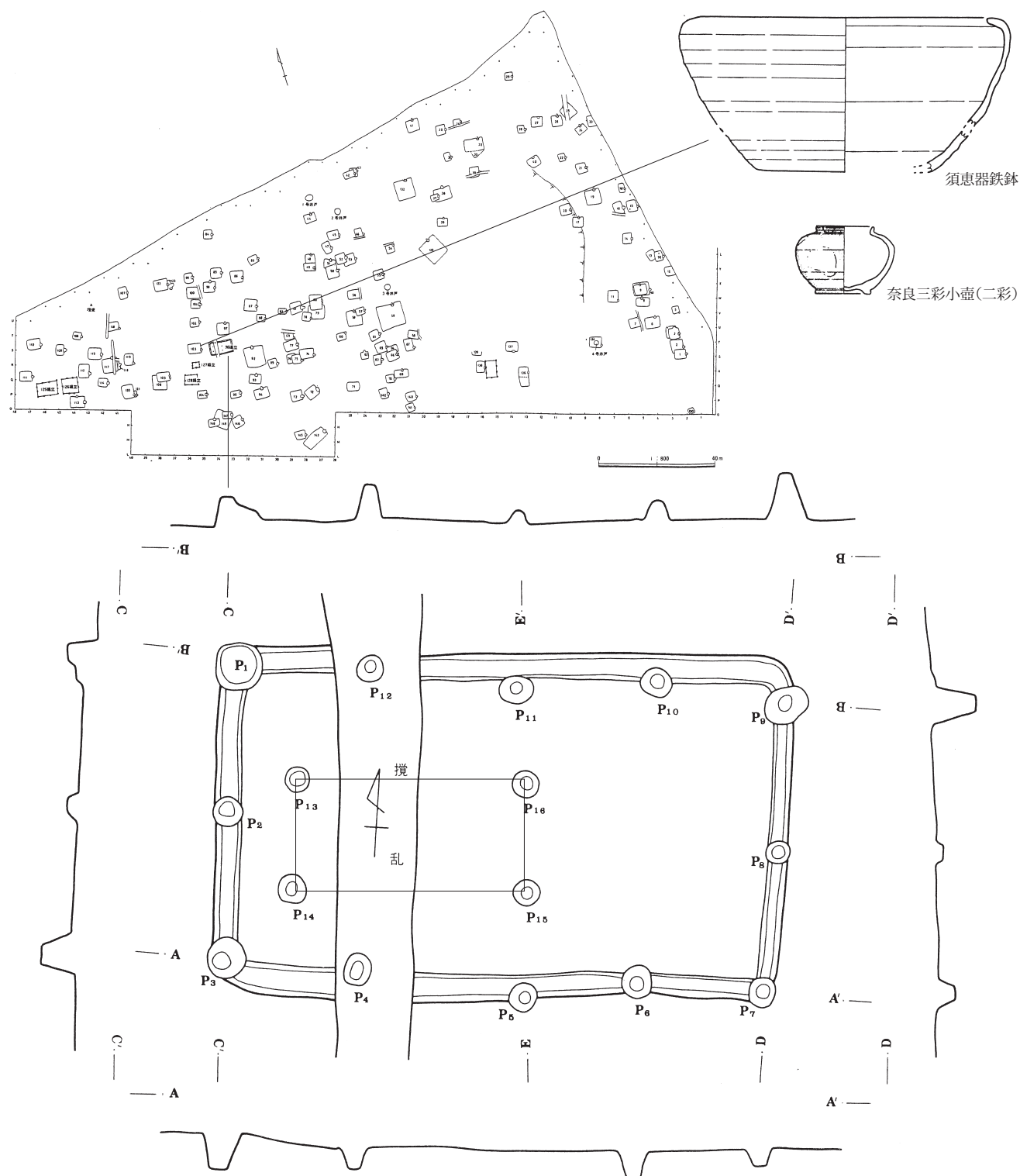
遺跡は上越新幹線や道路建設に伴う発掘調査によって東は猿府川までの南北900m、東西300mに及ぶ範囲が想定され、弥生時代中期から平安時代にかけての集落で竪穴建物や方形周溝墓などが検出されている。

奈良三彩は8・9号竪穴建物から小壺の口縁部から胴部片が出土している。口径は4.2cm、胴部最大径は8.8cmを測る。出土位置は8号竪穴建物側の掘り方からである。8・9号竪穴建物については報文中に建て替えが行われ

たとの所見が見られ、奈良三彩についてもその際の地鎮具ではないかと想定されている。なお、出土した8・9号竪穴建物は共伴する遺物から存続した時期は9世紀第4四半期に想定される。

倉賀野上樋越遺跡 高崎市倉賀野町の倉賀野駅北側に位置する。烏川左岸の高崎台地上に立地している。現在整理作業中のため報告書は未刊行であるが、平成26年2

月6日に行われた現地説明会資料や『倉賀野中里前遺跡2』によると検出された遺構には竪穴建物12棟、掘立柱建物8棟、区画溝5条、大型土坑1基等があるとされている。掘立柱建物は2×3間の総柱が5棟と目立つことや出土遺物にも緑釉陶器や灰釉陶器、基石があることから一般的な集落とは異なるとことから富豪層の居宅や荘家などの施設が想定されている。



第6図 松井田工業団地E区全体図、E-103号竪穴建物出土の須恵器鉄鉢と奈良三彩、E-96号掘立柱建物全体図 S = 1/200、E-96号掘立柱建物 S = 1/80、遺物 S = 1/4

で、詳細は不明であるが、集落は7世紀から10世紀前半にかけて展開しているとみられる。

奈良三彩は調査区の南部に位置する62号竪穴建物から出土している。竪穴建物は南北2.6m、東西3.5mの規模で、東辺にカマドが構築されている一般的なものである。奈良三彩は、西辺壁際の床面より3cm上から出土しており、この竪穴建物に共伴するとみられる。残存状態は完形品で器高5.3cm、口径4.3cm、最大径8.0cmの小壺である。なお、蓋は共伴していない。共伴する遺物には「宅」と墨書された土師器杯、底部回転糸切り後中央部を残し回転ヘラ削りされた須恵器杯、器高10cmほどの小型甕、カマド煙道部から土師器甕とカマド内と奈良三彩が出土した脇から鉄製匙が出土している。62号竪穴建物の存続時期については共伴する須恵器杯や土師器小型甕から8世紀後半の年代が想定される。

川上遺跡 遺跡は伊勢崎市下舐町(旧赤堀町)に位置し、多田山丘陵から続く低台地先端部の粕川右岸に立地する。発掘調査は7次に及んでいる。奈良三彩は2次の発掘調査で出土しているが、報告書が未刊のため詳細は不明である。

2次調査では古代の竪穴建物が主体とされ、奈良三彩も竪穴建物から出土している。出土した奈良三彩^{注8}は小壺の底部から胴部下半部で高台径は5.0cmである。釉薬は三色とも鮮明な状態であった。

奈良三彩が出土した南側の1次調査区では道路や火葬骨墓などが検出されている。火葬骨墓は川原石を引き詰めた中央に石櫃が置かれ、その周囲を2間×3間の掘立柱建物が覆うように建てられており霊廟的な施設であったと想定されている^{注9}。この掘立柱建物は梁間4.80m、桁行6.40mを測り、柱穴は方形に近い形状で規模は1.0m前後である。また、建物内や周囲からは軒丸瓦や平瓦、鉄釘、鉄鋌、銅製鈴が出土している。

安養寺森西遺跡 遺跡は太田市安養寺町(旧尾島町)に位置し、利根川が中流域となる地域の左岸、尾島台地に立地する。発掘調査では飛鳥時代～平安時代前期の集落、中世の掘立柱建物、土坑などが検出されている。飛鳥時代～平安時代前期の集落は、竪穴建物が主体で41棟が検出され、8世紀～9世紀代のものが大部分である。周囲の集落では10世紀代の竪穴建物も存在する事例が多いが、この遺跡では見る事ができなかった。

奈良三彩はAY-15号竪穴建物から小壺の口縁部から胴部片が出土している。この竪穴建物は一辺3.8mほどの一般的なもので出土遺物は須恵器杯蓋、土師器杯、甕などが出土している。共伴する土器の多くは埋没土中からの出土で存続していた時期を特定することは難しいが、概ね8世紀後半代に比定される。奈良三彩小壺は口径5.4cm、胴部最大径13.0cmを測る。釉薬は二次焼成のため剥落しているが、白色、褐色とも確認できる。な

お、前述のように釉薬が剥落した部分や断面に煤が付着しており、二次焼成を受けていたことがわかるが、竪穴建物自体には炭化物が確認できないことから、建物の火災などで被災したとは考えられない。竪穴建物の床面中には灰の飛散が確認されているが、床面には焼土が見られないことから灰を廃棄したとみられる。こうした状況から奈良三彩は他の処で火を受けてこの竪穴建物に廃棄された可能性が窺える。

八ヶ入遺跡 遺跡は太田市東今泉町に位置し、金山丘陵の北側に広がる渡良瀬扇状地の西端に立地する。遺跡地は明治期に「山田郡古氷村」であることから古代山田郡衙の推定地とされているが、今回の発掘調査では該当する遺構や遺物は検出されていない。山田郡衙については八ヶ入遺跡の東に位置する楽前遺跡や東今泉鹿島遺跡から大型の掘立柱建物や獣脚円面硯がみられることからこの付近に存在している可能性が指摘されているが確証は得られていない。遺跡は旧石器時代～中世に至る遺物が出土しているが、古代の集落は8世紀後半から10世紀代の竪穴建物主体の集落遺跡である。

奈良三彩は3区83号竪穴建物から小壺蓋の破片が出土している。この小壺蓋は4分の1程度の残存状態であるが、胎土の色調はやや黄色味を帯び、釉薬も緑色と白色の2色しか確認できないことから二彩とみられる。大きさは口径4.2cm、器高1.5cmを測る。出土した竪穴建物の存続時期は共伴する須恵器杯から10世紀前半代に想定される。

町田小沢遺跡 遺跡は沼田市町田町に位置し、薄根川と四釜川に挟まれた段丘面、北側を戸神山、東側を峰丘陵に囲まれた平坦面に立地する。標高は405～410mで東側には小沢川が南流する。発掘調査は2000㎡ほどの範囲ではあるが、弥生時代後期の竪穴建物3棟、8世紀後半～9世紀末にかけての竪穴建物が13棟検出されている集落遺跡である。

奈良三彩は9号竪穴建物から出土している。この竪穴建物からは9世紀前半に比定される高台付盤や椀、9世紀第4四半期に比定される土師器甕や鉄斧、鎌、門扉金具と想定される金属器が出土している。竪穴建物の存続時期については9世紀代のどこに位置づけられるかまでは断定できない。出土している奈良三彩は小壺蓋である。大きさは口径5.0cm、摘径0.7cm、器高0.8cmを測り、天井部中程に1条の凹線が巡る。出土はカマド左袖の燃焼部よりからである。表面は被熱の痕跡が観察できないことから竪穴建物のカマドを構築したときに埋納されたと考えられる。

町田小沢遺跡から出土した奈良三彩については出土位置や状態からカマド祭祀に伴うものと想定される。

伊勢町地区遺跡群天神遺跡 遺跡は中之条町伊勢町の中之条駅の南側に位置する。吾妻川左岸の河岸段丘上に立

地している。報告書が刊行されていないため詳細は不明であるが、展示図録などによると遺跡は大型竪穴建物や掘立柱建物が複数検出されている。出土遺物には奈良三彩の他に「行」と墨書された土器や「招」または「松」、「柘」と判断される銅印があることから富豪層の居宅等の施設が想定されている。

奈良三彩は奈良～平安時代に比定される竪穴建物2棟から5点が出土している。5点のうち3点は接合したため3個体とみられ、接合した個体は杯または碗蓋、残りは瓶類とみられる。

四戸遺跡 遺跡は吾妻郡東吾妻町三島に位置し、吾妻川右岸の河岸段丘上に立地している。発掘調査はすでに終了し、現在整理作業中である。調査遺跡発表会発表要旨等^{注10}によると弥生時代から平安時代の集落と中世以降の各種遺構が検出されているとのことである。

奈良三彩は2区51号竪穴建物から短頸壺が出土している。この短頸壺は口縁部から胴部の一部が破損した状態で出土していたが、同一竪穴建物内からは同一個体とみられる破片も出土し、接合の結果ほぼ完形になっている。なお、蓋は伴っていなかった。短頸壺の大きさは口径13.0cm、胴部最大径25.0cm、底径13.9cm、器高18.7cmを測る。釉薬はやや退色し、淡い色調を呈して



写真1 四戸遺跡出土奈良三彩

いた。この竪穴建物からは須恵器碗や土師器甕が出土している。こうした相伴している土器からこの竪穴建物の存続時期は9世紀第3四半期に比定できる。

出土遺跡・遺構の検討

各出土遺跡に記載したように唐三彩を出土した遺跡は2遺跡、奈良三彩を出土した遺跡は28遺跡を見ることができた。このうち、寺井廃寺、清里南部遺跡群中島遺跡、清里南部遺跡群薬師前遺跡、倉賀野上樋越遺跡、川上遺跡、四戸遺跡については報告書が未刊行であるため詳細について不明な点もあるが、出土遺跡の性格や出土

した遺構からの相伴遺物などから推定すると次のようなことが指摘できる。

1 唐三彩

唐三彩については境ヶ谷戸遺跡については周辺の駅家や郡衙などに関連する集落遺跡との見方が強いが、出土遺物には塔碗蓋摘や大型の獣脚付火舎など仏具的要素が強い土器が出土している。こうした遺物からは寺院に関連する集落とも見ることが可能であり、唐三彩も寺院での祭祀具との想定も可能である。

多田山古墳群12号墳については墓前祭祀という点では一致しているが、その時期について被葬者の埋葬時、その後の祖への祭祀の二通りの説^{注11}が提示されている。埋葬時期については7世紀後半代との年代が示されている。墓前祭祀が行われた前庭部から出土している相伴遺物を見ると7世紀後半代の須恵器長頸壺、8世紀前半代の須恵器平瓶、8世紀後半代の土師器杯、9世紀前半代とみられる須恵器碗が出土しており、墓前祭祀が行われた時期は埋葬時の7世紀後半から9世紀前半までの可能性が想定される。そうした中で、奈良三彩が墓前祭祀に供せられた年代については日本に唐三彩が持ち込まれたとされる8世紀以降^{注12}の墓前祭祀であると想定される。また、唐三彩、奈良三彩が墓前祭祀に用いられた例は少なく、愛知県豊橋市滝ノ平C2号墳^{注13}でみられるだけである。滝ノ平C2号墳では多田山12号墳と同様に前庭部から奈良三彩短頸壺が細片状態で散在した状態で出土している。滝ノ平12号墳は二本松古墳群に属するが、この古墳群では追葬した古墳が多くみられることから奈良三彩短頸壺も8世紀後半に追葬されたときの墓前祭祀で用いられたか、この地方では追葬時には石室内を清掃する例がみられるとされており、この清掃によって供献されていたものが前庭に廃棄されたとみられている。

多田山12号墳と滝ノ平C2号墳を同等に考えることはできないが、唐三彩や奈良三彩が古墳に供献され、その出土状態も前庭部から細片で散在した状態であるなど同様であることから共通点も考える必要がある。また、古墳に三彩陶器を供献する例も希である。こうしたことは三彩陶器について考える上で重要な視点と思われる。

2 奈良三彩

奈良三彩は出土した遺跡をみると寺院から複数の出土がみられるのに対して集落からほとんど単独の出土である。

(1) 寺院の仏具

寺院の中では山王廃寺、上植木廃寺、上野国分寺、十三宝塚遺跡で複数から10数点や十三宝塚遺跡のように74点と多量の出土みることができる。特に飛鳥・奈良時代に創建された寺院では数の多寡はあるものの平城京や畿内の寺院と同様に仏事には奈良三彩が使用されていたことがその出土位置などからわかる。

奈良三彩が仏事に使用されていたことは正倉院^{注14}に残る奈良三彩や平城京薬師寺や姫寺、大安寺の発掘調査事例から多くの奈良三彩が出土していることから想定されている。詳細は後述するが、平城京内の寺院では奈良三彩が仏事の供養具であり、祭祀具として使用されていることが確認されている^{注15}。また、地方でも『千葉県史』に奈良三彩の出土について集成されている。この中でも上総国分寺や国分尼寺、下総国分寺や国分尼寺及び関連する遺跡からの出土、文六第6遺跡、井戸向遺跡など寺院跡とされている遺跡から複数の奈良三彩の出土みられることから畿内と同様に使用されていたと想定される^{注16}。

こうした平城京や千葉県内の事例から奈良三彩が寺院に仏具として所蔵されていたことは都城だけでなく地方の寺院にも数や器種に違いは見られるが、共通していることである。群馬県内の寺院遺跡でも奈良三彩が生産された時期にすでに建立されている寺院の多くには朝廷より下賜されていた可能性が高い。その中でも十三宝塚遺跡は8世紀後半に建立された檜前部氏の私的な寺院とみられる。同様な寺院は勢多郡に所在する上西原遺跡があるが、上西原遺跡では奈良三彩の出土は小壺の1点だけである。十三宝塚遺跡の寺院に多くの奈良三彩が下賜された背景には称徳天皇の采女として重用されていた檜前部氏の子女である老刀自と関係が深いとみられる^{注17}。

また、出土地点についても薬師寺は973(天禄四)年の大火によって金堂と東西塔を除き、講堂、中門、回廊、東西僧坊、食堂など中心伽藍が焼失している。このため、西僧坊跡の発掘調査では当時の様相が明瞭に検証されている。これによると僧坊は前室、中室、後室に分かれており、前室からは小金銅仏をはじめ鉄鉢、多口瓶、瓶、火舎など多くの奈良三彩が出土している。こうした出土状況から僧坊前室は仏間として僧侶による日常的な仏事が営まれたとされている。また、中門から瓶が出土していることについても仁王像の台座近くであることからここでも仏事が行われ、ここで司られた仏事に伴って奈良三彩瓶が使用されたとされている^{注18}。

こうした平城京薬師寺からの出土状況は群馬県内の寺院跡にも共通する点が見られる。県内の寺院から出土した奈良三彩はほとんど小片ではあるが、出土地点を見ると回廊内の金堂や塔、講堂の周辺から多く出土しており、薬師寺同様に仏事に使用されたと想定できる。

山王廃寺では回廊内の塔と金堂間のからも出土しているが、講堂の北側で検出された大型の掘立柱建物の周囲から出土している。このことは薬師寺の例からするとこの建物が僧坊なり食堂であった可能性が窺えることになる。

上植木廃寺でも詳細は記載されていないが、南門、金堂、塔やその周辺からと食堂から出土している。

上野国分寺については詳細が不明であるが、調査地点から推定すると南門や塔、講堂及びその周囲から出土した可能性が高い。

十三宝塚遺跡でも回廊内の基壇建物1から複数の椀や八、火舎が出土し、基壇建物3からは複数の火舎、基壇建物4からは複数の椀がなどの多くの奈良三彩が出土しているが、周辺の回廊周辺の掘立柱建物や竪穴建物からも出土が見られる。掘立柱建物は寺院に付随するとみられる施設と想定できるが、竪穴建物については一見寺院に付随するとは考えにくい、竪穴建物の存続時期をみると16号竪穴建物は共伴する土器がみられないため時期を明らかにすることはできないが、奈良三彩の他に共伴する土器が出土している27号・38号竪穴建物は27号竪穴建物が10世紀第1四半期、38号竪穴建物は9世紀前半の時期が想定される。十三宝塚遺跡の寺院が存続した年代については9世紀後半代までと想定されている。この年代観からすると27号竪穴建物は寺院が衰退・廃絶後に存在したとみられるが、38号竪穴建物は寺院が存在していた時期に存続していたことになる。この38号竪穴建物がどのような性格を持っていたかを明らかにすることは難しいが、寺院自体は1号基壇建物が9世紀中頃に礎石建物に建て替えが行われていたとされており、衰退する過程ではなく、まだ何らかの経済的背景が見られることから、38号竪穴建物は仏事なり祭祀を執り行う人物が居住していた可能性が高いといえる。

同様な事例として上西原遺跡も寺院が存続した終末期の9世紀後半代には柵か塀が崩壊し、複数存在した基壇建物や掘立柱建物は中心的な基壇建物が1棟だけが残るだけになっている。こうした中、元々柵や溝によって区画されていた内部にも62号竪穴建物や82号竪穴建物が構築されてくる。この竪穴建物の存続時期は最後に残っている基壇建物と同一の時期のものである。そして62号からは一般的な食前具や煮沸具といった土器だけでなく須恵器鉄鉢が出土している。82号竪穴建物からは前記のように奈良三彩小壺が出土している。こうした状況は寺院が衰退していく中で僧坊の維持も困難になり、僧侶が竪穴建物に居住し、日常の仏事で使用される奈良三彩小壺や鉄鉢が残されたことによるとみられる。

(2) 祭祀

祭祀遺構では二之宮宮下東遺跡、田端遺跡、八木原元宿南遺跡の3遺跡を取り上げた。これらの3遺跡はそれぞれ、祓いに伴う祭祀、地鎮、清めの祭祀で奈良三彩が使用されたとみられる。

祓いに伴う祭祀は群馬県内をみると人形を出土している前橋市元総社寺田遺跡^{注19}が確実であるが、この他に祭祀遺物や墨書土器を出土している前橋市二之宮洗橋遺跡^{注20}、富岡市小舟遺跡^{注21}を挙げることができる。

二之宮洗橋遺跡からは円面硯や竈形土製品の破片と

「芳郷」・「郷」・「得万」など多くの墨書土器が出土、富岡小舟遺跡からも手捏ね土器や竈形土製品と「野田」・「子野」・「万」が出土し、祭祀行為が行われていたと見られる。二之宮宮下東遺跡では古墳時代から平安時代にかけて多くの土器だけでなく木製品も出土している。その中には則天文字による「天」をはじめ多くの墨書土器や施釉陶器が出土している。これらの土器は比較的良好な残存状態を示していることから廃棄されたものとはみられず、ここでも祭祀行為が行われ、高級品である奈良三彩や施釉陶器が使用されたと想定される。

田端遺跡から出土した奈良三彩小壺が地鎮のために納められたものか否かについて埋納されたとみられる遺構が他の土坑と重複しているため状況や出土した遺物が奈良三彩小壺しかみられないことなどから言及が難しいが、山王廃寺では寺域の北東部に相当する地点から緑釉陶器水注や段皿・椀、銅鏡が埋納された遺構^{注22}が検出され地鎮に用いられたと想定されている。また、奈良三彩小壺を使用した地鎮としては広島県府中市の備後国府跡ツジ遺跡^{注23}から蓋付の奈良三彩小壺が出土し、内部にガラス製小玉54点が納められていた。出土した遺構は調査区の隅のため詳細は不明であるが、山王廃寺の緑釉陶器等を用いた地鎮遺構と同様に礫の上に奈良三彩が置かれた状態で埋納されていたとされている。また、調査区内からは一辺1.0mほどで方形を呈する大型の柱穴をもつ掘立柱建物^{注24}が検出され、掘立柱建物からではないが「厨」墨書が出土しており備後国府の施設の一部と想定されている。

こうした山王廃寺や備後国府での事例から田端遺跡のB区127号土坑も西側に寺院が存在することなどから地鎮のために奈良三彩小壺が用いられたと想定される。

八木原元宿南遺跡について報告者は釘の出土から墓坑とも見解を示している。しかし、出土した1号石組遺構は規模が南北3m、東西4m近い規模を有していることや奈良三彩と共伴して出土した土師器杯の年代に差がみられることから副葬品と考えるのは無理があると思われる。こうしたことから石組遺構をみるとこのような遺構には奈良県石神遺跡や宮城県郡山遺跡の石組遺構^{注24}に類似している。石神遺跡や郡山遺跡では引水のための溝が伴うが、八木原元宿南遺跡ではこの部分が確認されておらず、断定はできない。しかし、出土した奈良三彩が浄瓶であり、浄瓶の用途からみればこの石組遺構でも清めの祭祀が行われたと想定できる。

(3) 村落寺院の祭祀具

集落の遺跡から出土した奈良三彩について、その用途や性格を言及することは難しいが、その中でも共伴する遺物や類例などから想定できるものがある。

その代表的なものとしては以前に木村衡(木村2000)が指摘している松井田工業団地遺跡^{注25}があげられる。奈良

三彩を出土したE-103号竪穴建物からは奈良三彩小壺とともに共伴遺物の中に托鉢に使用される須恵器鉄鉢が出土しており、さらにこの建物の東側には村落寺院の堂宇^{注25}とみられる掘立柱建物も存在することから、この村落寺院の仏事を行う僧侶^{注26}が居住していた建物であったことが想定される。

松井田工業団地遺跡のように仏堂とみられる掘立柱建物と僧侶が居住したとみられる竪穴建物が近接して存在している例は数少ないが、共伴遺物から僧侶の居住していた竪穴建物に仏事や斉会に祭祀具として使用する奈良三彩を保管していたと可能性を示す事例としては松峯遺跡^{注26}があげられる。

松峯遺跡からは62号竪穴建物から奈良三彩小壺が出土しているが、この他に土師器、須恵器などの土器と鉄製匙の出土が出土している。この時期、すでに箸や匙は普及しているが、一般的には木製である。こうした中、金属製品は高級食器として一部の階層や寺院でしか所有、使用していない用具である。寺院などは佐波理鏡と同様に銅製によるものが主体であるが、鉄製でも鍍が出なければ輝きを持っており、三宝の器として祭られた可能性がみられる。こうした金属製の食器は一般の庶民が入手することが難しいと考えられる。金属製食器の所有は一部の階層や仏事を執り行う僧侶に限定されることから、松峯遺跡では仏堂とみられる掘立柱建物などは検出されていないが、62号竪穴建物の居住者は僧侶であった可能性が窺える。

この他では川上遺跡で霊廟的な施設が想定されており、この施設の祭事を執り行うための祭祀具として奈良三彩小壺が用いられたなら川上遺跡の奈良三彩を出土した竪穴建物にも僧侶が居住していた可能性が窺える。

また、こうした寺院に関連する集落から出土した奈良三彩としては黒熊八幡遺跡^{注27}があげられる。黒熊八幡遺跡から出土した奈良三彩は遺構外からの出土であるため、詳細なことは言及できないが、遺跡からは多くの円面硯や風字硯が出土しており、識字層の存在が窺え、隣接する黒熊中西遺跡では天台宗系とみられる寺院が検出されている。こうした状況証拠だけであるが、当時の集落からの陶硯出土の状況を考慮すると寺院に付随する集落であった可能性が高く、奈良三彩小壺も仏事の祭祀具であった可能性が窺える。

(4) 竈祭祀

竈祭祀にかかわる奈良三彩としては町田小沢遺跡9号竪穴建物や元総社西川遺跡・塚田中原遺跡154号竪穴建物から出土したものはその出土地点から竈神に伴う祭祀の可能性が窺える。竈神祭祀については筆者が以前竈形土製品につて検討^{注27}したときに当時の人々が竈神に対する畏敬の念を強く意識しており、竈神を竈内部に封じ込める行為や饗応する行為をみられたが、奈良三彩とい

う当時第一級の貴重品を供えることで竈神を祭ったと想定できる。

(5) 奈良三彩を焼く

この他の祭祀に伴うと想定される奈良三彩には西国分新田遺跡や安養寺森西遺跡から出土したものがあげられる。これらの奈良三彩はともに二次焼成を受けた小壺である。特に安養寺森西遺跡では出土した竪穴建物の時期も奈良三彩が生産されている時期であり、貴重な品を焼くという行為は想像しがたいものである。しかし、このような事例としては東京都調布市上石原遺跡^{注28}から出土した奈良三彩と同様のものと想定される。上石原遺跡では古墳時代後期の竪穴建物が埋没していく過程の窪地で奈良三彩多口瓶2個体が焼かれた事例として知られている。奈良三彩多口瓶は滋賀県南滋賀廃寺、京都府北野廃寺、奈良県平城京薬師寺や姫寺など大寺院や佐保山古墓など限られた遺跡からしか出土していない。こうした貴重な奈良三彩多口瓶がなぜ焼かれたかは解明されていないが、何らかの祭祀に関わる行為であったと想像される。

西国分新田遺跡や安養寺森西遺跡では小壺であるが、小壺とはいえ当時の陶器としては希少で貴重な品に変わりはない。この希少、貴重品を焼く行為はその後使用することができなくなってしまい、再び祭祀行為に使用することは不可能になる。こうしたことから所有者は神仏に捧げるため二度と使用しないことを表現するために焼くという行為に及んだと想定できることから祭祀行為の一つと考えても差し支えないのではないだろうか。

(6) 副葬品として

また、仏具や祭祀での使用ではないが、墓坑への副葬品と想定される奈良三彩には元総社西川・塚田中原遺跡219号土坑から出土した腕蓋片がある。この土坑は規模がやや大きいことから墓坑と判断するには疑問符が着く。しかし、木片の付着した釘の出土は八木原元宿南遺跡と同様ではあるが、八木原元宿南遺跡の奈良三彩を出土した遺構とは異なり形状は土坑であることから墓坑との想定も可能である。奈良三彩を副葬する例は、平安時代の緑釉陶器に比べると類例は少ないが、奈良県小治田安万侶墓の小壺、佐保山古墓の多口瓶、千葉県嶺岡東上牧遺跡の短頸壺蓋などが副葬された事例をみることが可能である。

(7) その他

以上、寺院での仏具、祭祀、墓坑への副葬品に使用された奈良三彩についてみてきたが、この他に出土状況からその性格がわからない事例がある。

こうした事例としては国分寺中間地域G26号竪穴建物から出土した小壺片、元総社蒼海遺跡群13次調査1区3号竪穴建物出土の小壺片、41次調査H4号竪穴建物出土の腕蓋片、下東西清水上遺跡35号竪穴建物出土の香炉片、八ヶ入遺跡3区83号竪穴建物出土の小壺蓋

片、四戸遺跡2区51号竪穴建物出土の短頸壺がある。

以上の5例は四戸遺跡を除くと出土位置の確認ができないものもあり、出土した竪穴建物に確実に共伴するか根拠に乏しい点もあるが、出土した竪穴建物に共伴するとみるならば、それぞれの竪穴建物が9世紀第2四半期から10世紀前半代に比定される。こうした状況は奈良三彩の生産された年代とは半世紀以上の年代差がある。こうした年代差については後世に持ち込まれた可能性もあるが、一般的には伝世したものとの考えられている。そしてその用途としては村落に建てられた小規模な寺院や堂宇で僧侶が仏事を司る際に祭祀具として使用していたとされている。なお、この場合、村落寺院や堂宇に奈良三彩が備えられたのではなく僧侶が所有していたと考えられる。このことは仏事を司る僧侶が一箇所の寺院や堂宇だけを司るのではなく複数の村落寺院や堂宇で仏事を司っていたとみられる。こうしたことから、僧侶が仏具や祭祀具を持って複数の村落寺院や堂宇を廻ったとみられる。こうしたことから集落の竪穴建物に伝世した奈良三彩は小壺や火舎・香炉、碗蓋など小型のものが多かったとみられる。

そうした中、四戸遺跡から出土した短頸壺は竪穴建物からの出土例をみることができない。奈良三彩短頸壺はその用途が明らかなものとしては大阪府大蔵冠山遺跡や和歌山県一里山古墓(北名古曾墳墓)での奈良三彩短頸壺自体を骨臓器や前述した滝ノ平C2号墳での墓前祭祀として使用している例がある。しかし、上野国分寺では短頸壺の出土がみられることから寺院でも仏具としての使用が想定される。こうした状況を四戸遺跡に当てはめると東4kmには飛鳥時代に創建された金井廃寺^{注29}が存在する。この金井廃寺は発掘調査が実施されていないため詳細などは不明であるが、大型で円形に柱座を作り出す加工をした礎石が20数個残存していることや瓦の出土範囲などから伽藍を有する寺院であったことがわかっている。こうした寺院では山王廃寺や上植木廃寺のように複数の奈良三彩を所有し、その中には小壺や腕皿などの小型品だけでなく大型の短頸壺が存在した可能性窺える。この金井廃寺に所有されていた短頸壺が四戸遺跡で仏事を司る僧侶に伝世したとみるのが妥当と考える。

おわりに

以上、群馬県内から出土した奈良三彩を外観したが、出土例では十三宝塚遺跡から74点と他県では例を見ない出土量を誇る遺跡が存在することから東国では突出した出土例をみることができた。遺跡数は千葉県が45遺跡80点^{注30}と多いが、古代の国別にみると千葉県は上総国・下総国・安房国の三国が含まれており、それぞれ上総国9遺跡、下総国34遺跡、安房国2遺跡である。この他では武蔵国18遺跡25点、信濃国14遺跡20点である。

また、東国の上野国以外では一遺跡からの出土としては石川県羽咋市寺家遺跡から20点が最も多い例である。こうした点からも古代上野国の出土遺跡や出土例をみると東国では有数の数であるといえる。こうした背景には当時の上野国の豪族が重視さえていたことや称徳天皇の采女として重用された檜前部老刀自によるものと考えられる。

また、奈良三彩の用途ではほとんどが寺院での仏具や衾いや地鎮などの祭祀具であると判断できた。また、集落から出土した奈良三彩も木村や巽等によって指摘されているように集落の竪穴建物に居住する僧侶が仏事を司る際の祭祀具であることがわかった。

また、寺院では回廊内からの出土が多くみられるが、僧坊や食堂などの施設と考えられる地点からも出土しており、今後遺構の性格が明らかでないときなどは奈良三彩からその施設を推察できることもあり得るといえる。

以上、平成28年度の展示やギャラリートークでは十分説明仕切れなかった点についても触れることができたとは思われるが、今後上野国分寺などでの詳細な出土地点の公開や倉賀野上樋越遺跡などの報告書の刊行されたときにはその資料を検討することによって古代上野国での奈良三彩の使用方法や用途、そして伝世のあり方がより解明されると思われる。そのためににより一層の資料の蓄積が期待される。

末筆ではあるが、今回奈良三彩についての展示を行う機会を与えて頂いた事業団や多くの資料を提供して頂いた県内の教育委員会やいろいろとご教示を頂いた諸氏には感謝の意を表します。

注

注1 唐三彩、奈良三彩についてはその希少性から小片であっても報告されているが、発掘調査に伴わない出土事例は知られないことがある。太田市内では建設工事に伴って奈良三彩が出土していることを太田市教育委員会小宮俊久氏よりご教示を受けた。

注2 木村衡2000、玉田芳英1994、高橋照彦2001・2002、巽淳三郎2004、吉田恵二2001など各氏によって指摘されている。(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団1992「黒熊中西遺跡(1)」(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第135集、1994「黒熊中西遺跡(2)」(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第169集

注3 寺井廃寺については確認調査が実施されているが、報告されていないため太田市ホームページや群馬県遺跡大辞典を参照した。

注4 松田猛「Ⅷ考察1. 遺構の変遷と性格」『上西原遺跡』群馬県教育委員会

注5 1998年に五島美術館と愛知県陶磁資料館で開催された特別展『日本の三彩と緑釉—天平に咲いた華—』図録注の「彩釉陶器出土遺跡地名表(3)—日本出土の三彩・緑釉陶器」より抽出した。

注6 上信越自動車道建設に伴う発掘調査が行なわれ、寺院跡からは多くの瓦や鎮壇具とみられる土器が出土している。(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団1992「黒熊中西遺跡(1)」(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第135集、1994「黒熊中西遺跡(2)」(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第169集

注7 木村衡2000

注8 奈良三彩については2002年に高崎市観音塚古墳資料館で開催された企画展「かみさま ほとけさま—古代群馬の仏教文化と墓制—」で展示されている。なお、川上Ⅱ遺跡については報告書が刊行されていないため詳細はわからないが、『南原遺跡10』を報告した永井智教による周辺遺跡を含めた考察で引用され、成果が紹介されている。

注9 永井智教は『南原遺跡10』の中で川上遺跡1次調査において検出された火葬墓とこれを覆う建物を霊廟的な施設と想定している。霊廟としての建物は類例をみることはできないが、このような霊廟的施設には吉備地方の後期古墳の石室に想定されるものがあるとしている。

川上遺跡の火葬墓と掘立柱建物の時期についてはともに8世紀後半と推定されるが、確かではない。しかし、その位置関係から掘立柱建物は火葬墓を覆うものであったことは想定され、西側に入り口が想定される。

注10 谷藤保彦2016

注11 発掘調査時点では埋葬時の墓前祭祀に伴うものとして唐三彩が日本へ搬入された時期など再検討することも考えられていた。その後、報告者は『群馬の遺跡』の中で共伴する平瓶が8世紀中葉から後葉に相当することを根拠に唐三彩が墓前祭祀に供せられた年代を平瓶と同様に想定している。また、この背景としては檜前部一族から称徳天皇に采女として出仕した老刀自との関係が強いとされている。深沢敦仁2004「多田山の唐三彩が語る歴史」『群馬の遺跡4』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

注12 唐三彩が日本に持ち込まれた年代は八次の遣唐使(702年)として唐に渡った大官大寺の僧道慈が九次の遣唐使船(718年)で持ち帰ったと考えられている。

注13 「滝ノ平C2号墳の報告は愛知県営開拓パイロット事業石巻地区埋蔵文化財調査団1976『二本松古墳群』」に収録されている。

注14 正倉院に残る奈良三彩については950(天曆四)年に東大寺羅索院雙倉に収められていたものが災害により雙倉が破損したため正倉院に移されたとされている。その用途は『東大寺要録』や陶器の底面に残る墨書から752(天平勝宝四)年～768(神護景雲二)年に執り行われた大仏開眼会や齋会、盂蘭盆会などの仏事、称徳天皇東大寺行幸に使用された記録が残っている。残存する奈良三彩の数量からも仏事で奈良三彩が使用された対象は天皇や皇族、大僧都など限られた階層とみられる。

注15 玉田芳英1994「施釉陶器の成立と展開—古代前半期を中心に—」『古代の土器研究会第3回シンポジウム 施釉陶器』

注16 千葉県内から出土した奈良三彩については田所真2004「第2章第5節2(2)施釉登記の量産と普及」『千葉県の歴史 資料編考古4(遺跡・遺構・遺物)』県史シリーズ12 千葉県刊行によって集成が行われ、出土遺跡や用途の検討が行われている。

注17 続日本紀では檜前部君老刀自は天平神護二(766)年に外従五位上、神護景雲元(767)年に上毛野佐位朝臣、神護景雲二(768)年に上野国国造の地位を賜っている。群馬県史編さん委員会1985『群馬県史 資料編4、原始古代4』群馬県による。

注18 薬師寺については森郁夫・吉田恵二・巽淳三郎・山崎信二1987「第Ⅵ章 考察 2. 土器」『薬師寺発掘調査報告書』奈良国立文化財研究所学报第45冊 奈良国立文化財研究所による。

注19 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団1996『元総社寺田遺跡Ⅲ』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第208集

注20 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団1994「二之宮洗橋遺跡」(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第166集

注21 富岡市教育委員会2008「富岡小舟遺跡」富岡市埋蔵文化財発掘調査報告書第28集

注22 山王廃寺から緑釉陶器水注と椀、段皿、銅鉢、須恵器椀の出土については梅沢重昭2012「前橋市総社町山王出土の緑釉陶器と伴出遺物」『山王廃寺～平成22年度調査報告書～』前橋市教育委員会に詳細が報告されている。

注23 府中市教育委員会2007『府中市内遺跡11—2005年度調査に関する報告—備後国府跡(ツジ遺跡)ほか』府中市埋蔵文化財調査報告第19冊

注24 長島榮一2009「コラム石組池」『郡山遺跡』日本の遺跡35同成社

注25 千葉県をはじめ南関東では集落遺跡から居宅や倉庫とは異なる掘立柱建物が検出されている。その多くは四面庇をもつ小規模な掘立柱建物や隣接して建てられていることから寺院建築にみられる「正堂」・「作合」・「礼堂」に相当すると指摘されている。須田勉2006「古代村落寺院とその信仰」『古代の信仰と社会』国土館大学考古学会編他

注26 ここでの僧侶とは官許による僧侶ではなく私度僧や優婆塞であると考え。

注27 竈神の祭祀については飯島吉晴2007『竈神と廁神』講談社学術文庫、狩野敏次2004『かまど』ものと人間の文化史17法政大学出版局、拙稿2016「竜形土製品」『研究紀要』(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

による。

注28 紀野自由1994

注29 吾妻町教育委員会1979『金井廃寺遺跡』

注30 井上喜久男2015「第3章消費遺跡解説 第1節東日本地区、第2節西日本地区」『愛知県史 別編窯業1 猿投系』愛知県

唐三彩・奈良三彩出土遺跡文獻

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団2004『多田山古墳群』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第328集

新田町教育委員会1994『境ヶ谷戸・原宿・上野井Ⅱ遺跡』新田町文化財調査報告書代13集

前橋市教育委員会1976『山王廃寺跡第2次発掘調査概報』

前橋市教育委員会1978『山王廃寺跡第4次発掘調査概報』

前橋市教育委員会1979『山王廃寺跡第5次発掘調査概報』

前橋文化財研究会1980『山王廃寺跡第6次発掘調査報告書』

前橋市教育委員会2007『山王廃寺～平成18年度調査報告～』山王廃寺範囲確認内容確認調査報告書Ⅰ

前橋市教育委員会2012『山王廃寺～平成22年度調査報告～』山王廃寺範囲確認内容確認調査報告書Ⅴ

境町教育委員会1981『十三宝塚遺跡 第5次発掘調査概報Ⅳ』

伊勢崎市1984『上植木廃寺発掘調査概報Ⅰ』

伊勢崎市1985『上植木廃寺発掘調査概報Ⅱ』

伊勢崎市教育委員会1985『上植木廃寺―昭和59年度発掘調査概報―』

伊勢崎市教育委員会1986『上植木廃寺―昭和60年度発掘調査概報―』

伊勢崎市教育委員会1992『上植木廃寺―平成2・3年度発掘調査概報―』

出浦崇2017「上野国佐位郡における郡家と寺院―上野国佐位郡正倉跡と上植木廃寺の調査成果から―」『古代東国の地方官衙と寺院』山川出版
中村涉2017「上野国新田郡家と寺井廃寺」『古代東国の地方官衙と寺院』山川出版

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団1992『史跡十三宝塚遺跡』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第134集

境町1996『境町史』第3巻歴史編上

境町教育委員会1981『十三宝塚遺跡第5次発掘調査概報』

群馬県教育委員会1999『上西原遺跡』

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団1994『二之宮宮下東遺跡』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第162集

渋川市教育委員会1995「3.八木原元宿南遺跡の調査」『市内遺跡Ⅷ』渋川市発掘調査報告書第44集

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団1987『上野国分僧寺・尼寺中間地域(2)(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第71集

前橋市埋蔵文化財発掘調査団2008『元総社蒼海遺跡群(13)』

前橋市教育委員会2013『元総社蒼海遺跡群(41)・元総社蒼海遺跡群(42)・元総社蒼海遺跡群(43)』

前橋市教育委員会2013『推定上野国府～平成24年度調査報告書～』上野国府範囲確認町阿呆酷暑Ⅱ

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団2003『元総社西川・塚田中原遺跡』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第323集

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団2005『塚田村東Ⅳ遺跡・塚田中原遺跡(0区)・引間松葉遺跡(Ⅲ区)』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第347集

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団1998『下東西清水上遺跡』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第239集

前橋市教育委員会1980『中島遺跡発掘調査概報』

前橋市教育委員会1980『富田遺跡群 西大室遺跡群 清里南部遺跡群 土地改良事業実施地区内埋蔵文化財発掘調査概報』

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団1998『冷水村東遺跡・西国分新田遺跡・金古北十三町遺跡』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第245集

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団1991『熊野堂遺跡(2)』

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第100集

高崎市教育委員会2014『倉賀野上樋越遺跡発掘調査現地説明会』資料、永井智教2015「Ⅴ総括 条里水田遺跡としての倉賀野中里前遺跡2、3.倉賀野東条里と周辺遺跡群の性格」『倉賀野中里前遺跡2』高崎市文化財調査報告書第357集

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団1983『森遺跡・中Ⅰ遺跡・中Ⅱ遺跡』

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第19集

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団1983『黒熊八幡遺跡』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第206集

松井田町教育委員会1990『松井田工業団地遺跡』

前橋市教育委員会1982『松峯遺跡』

赤堀村教育委員会1979『川上遺跡、女掘遺構発掘調査概報』群馬県佐波郡赤堀村文化財調査報告12

株式会社マルイ・山下工業株式会社2014『南原遺跡10』

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団1995『安養寺遺跡・大館馬場遺跡・阿久津宮内遺跡』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第190集

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団2010『ハケ入遺跡』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第505集

沼田市埋蔵文化財発掘調査団1990『町田小沢遺跡』

中之条町教育委員会・中之条町歴史民俗資料館2004「特別展 出土品にみる古代の文化 伊勢町地区遺跡群埋蔵文化財展」

谷藤保彦2016「四戸遺跡―奈良三彩短頸壺を出土した遺跡―」『調査遺跡発表会 古代と動く文化を学ぶ』(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

引用・参考文献

愛知県史編さん委員会2015『愛知県史 別編窯業1 猿投系』愛知県

井上喜久男2015「東国官衙遺跡にみる三彩・緑釉陶器」『考古学ジャーナル』NO.475

今井晃樹・神野恵・降旗順子2017「平城宮出土の奈良三彩陶器と施釉瓦磚」『奈良文化財研究所紀要』独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所

奥村清一郎1987「奈良三彩小壺とその出土遺跡について」『京都府埋蔵文化財論集』第1集 (財)京都府文化財調査研究センター

木村衡2000「地方における奈良三彩陶器小壺―東国を中心に―」『相模原市立博物館研究報告』第9集

紀野自由1994「東京都調布市上石原出土の二彩多口瓶」『考古学雑誌』第79巻第3号 日本考古学会

斉藤孝正2001「日本の緑釉・三彩陶器の流れ」『国立歴史民俗博物館研究報告』第86集

高橋照彦1997「出土文物からみた平安時代の儀礼の場とその変化」『国立歴史民俗博物館研究報告』第74集

高橋照彦2001「三彩・緑釉陶器と地方官衙」『考古学ジャーナル』NO.475

高橋照彦2002「日本古代における三彩・緑釉陶の歴史的特質」『国立歴史民俗博物館研究報告』第94集

高橋照彦2006「白鳳緑釉と奈良三彩―古代日本における鉛釉技術の導入過程―」『陶磁器の社会史 吉岡康暢先生古希記念論集』桂書房

巽淳三郎2004「古代の土器」『古代の官衙遺跡 Ⅱ 遺物・遺跡編』独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所

玉田芳英1994「施釉陶器の成立と展開―古代前半期を中心に―」『古代の土器研究会第3回シンポジウム 施釉陶器』

森郁夫・吉田恵二・巽淳三郎・山崎信二1987「第Ⅵ章 考察 2.土器」『薬師寺発掘調査報告書』奈良国立文化財研究所学報第45冊 奈良国立文化財研究所

吉田恵二2001「奈良三彩の生産と伝播」『考古学ジャーナル』NO.475

拙稿1983「Dまとめ1 奈良三彩陶」『森遺跡・中Ⅰ遺跡・中Ⅱ遺跡』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

拙稿1987「第4章考察 第4節奈良三彩陶」『上野国分僧寺・尼寺中間地域(2)』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

拙稿1998「第4章まとめ 第3節下東西清水上遺跡出土の施釉陶器について」『下東西清水上遺跡』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

拙稿1999「Ⅷ考察 5 施釉陶器について」『上西原遺跡』群馬県教育委員会

追注 7世紀後半に創建されている寺院については古代史では「白鳳期寺院」と呼称される。ここでは、土器遷年を軸に時代設定をおこなったことから「飛鳥時代」の呼称を使用している。